



しもだ かげき
志茂田 景樹 氏 (作家・タレント
/日本ペンクラブ会員)

演題:親・子・孫3代の心がつながるとき

1940年静岡県生まれ。「やっご探偵」で小説現代新人賞を受賞しデビュー。80年「黄色い牙」で直木賞受賞。その後ヒット作を輩出し、各メディアにも多数出演。また『キリンがくる日』で第19回日本絵本賞読者賞を受賞。最近ではボランティア・グループ「よい子に読み聞かせ隊」の隊長としても活躍。

血の絆だけじゃないつながりの尊さ

僕には息子が二人います。長男が43歳、次男が39歳です。次男はカリスマタクシードライバーという異名を取り、タクシー業界に特化した人材派遣会社を設立しておりますが、高校時代はやんちゃでした。学校にも行かず卒業も危うい。でも、担任の先生がいい人で、なんとか卒業はしました。

そんな次男が昨秋、武蔵野市議会議員選挙に立候補すると言い出しました。女房は心配して反対したのですが、僕は「やりたいならいいじゃないか」と言いました。でもせっかく出るならと、一緒に駅に立ったり選挙カーに乗ったり、本腰を入れて応援しました。でも、当選はそう簡単ではありません。そこで、僕は一つ争点を掲げるよう提案しました。

それは児童館の増設です。市には児童館が一つしかなく、周辺市町と比べても極めて少ない。次男は小さいころから児童館に通って、そこで友達を増やして、おじいちゃんやおばあちゃんに大切にしてもらった。その血の絆だけじゃない

つながりの大事さを次男は身をもって知っていた。これは僕も次男から教わったことです。年齢に関係のない心のつながり。これを次男は訴え、無事に当選することができました。

●個性を開放することで、自分らしく

年代を超えた絆の話をしましたが、人間はそれぞれ違う個性・人間性を胸の内に秘めているものです。それを秘めたままではもったいない。僕は40歳で直木賞を受賞しました。そして人気者になりましたが、どこかで空しさがありました。

それは何だろうと考えたところ、赤ん坊のころの無垢な心を忘れてしまったことかなって思います。成長すると、虚栄心や嫉妬心など不要なお札を貼ってしまいます。それを剥がしたいと思っていた時です。ニューヨークの知人が、マリリン・モンローの柄が入ったタイツをくれました。最初は目もくれませんでした。執筆の息抜きで履いたところ、「えっ、いいじゃないか」って。30年も前の話です。周囲は白い目でしたが、そのうち心地よくなって。以来、僕のファッションはタイツが主体。今は自分らしく生きています。

●みんな家族。笑顔で楽しく過ごそう

奇抜なファッションがきっかけで、テレビにも多く出演しました。最初は息抜きにもなり良かったのですが、そのうち疲れてしまっ。これからは書きたい物だけを書こうと、出版社を立ち上げ、同時に全国各地の本屋でサイン会を始めました。ショッピングモールなどの本屋が主だったので、多くの子どもが奇妙なおじさんを見ようと集まりました。その時です。「読み聞かせをやってみようかな」とひらめきました。

すると、騒がしかった子どもたちが静まりかえり、気がつく大人たちも物語の世界に入り込んでいました。そして僕自身も、とても清々しい気持ちになっていました。「絵本の読み聞かせって、こんな力があるんだ」と気付いた。1999年8月に「よい子に読み聞かせ隊」を結成しました。どの会場でも親子に限らず、みんな笑顔になります。「人間にはそういう絆も必要だな」って改めて教えてもらっています。先祖をたどれば、皆さん血がつながります。争いごとをしている場合じゃありません。楽しく元気に過ごしていきましょう。